

当別文芸の会だよりNO.89

H29・11/28 (連絡先・河地良一 TEL090-5076-2550)

11月の読書会は、城山三郎の作品でした。

初冬の季節を迎え、まわりも雪景色となりましたが、11月25日(土) 13:30からの読書会には、天候もますますのなか、8名の会員のみなさんが参加されました。

今回は、城山三郎の短編作品「そうか、もう君はいないのか」(新潮文庫)を、大畑裕貴さんの司会進行で、読后感想交流となりました。

城山三郎は昭和2年(1927)、名古屋市で生まれ、海軍特別幹部練習生として終戦を迎え、戦後、大学を卒業後、愛知学芸大学に奉職し、景気論などを担当していましたが、昭和32年(1957)、経済小説で文学会新人賞を受賞し、翌年、直木賞を受賞後、作家に専念し、主に経済小説の分野で名をあげました。

彼の作品は、骨太で気骨のある男の生き方を取り上げた作品で、多くのファンを魅了してきましたが、平成19年(2007)、80歳で亡くなりました。

それより7年前の平成13年(2000)、4歳年下の妻(68歳)をガンで亡くし、それからは気落ちして妻との終の住処には戻らず、仕事場が住居となったようですが、彼の死後、次女がこの原稿を見つけ、出版社のすすめで作品となったようです。

読后感想交流では、おおむね好感をもって受け入れられたようですが、夫婦の模範(モデル)はなく、百人百様でいいんだろうというのが、本音のようでした。また、会員の年齢は50代から80代で、将来の自分の死をどのように覚悟したらよいかや、女性の方がどんな環境にも順応できる(長生きだ)など、様々な話題で、話が大変盛り上がりました。みなさん、ご苦労さまでした。